

金銀の箱だみて甚費多かる、殊に東都には大方かぶとの外、大なる木偶人あまた立ならべ侍る、一形のあたひ數百匁に及ぶ有とぞ、是もまた時尙の觀なりし。

○下

〔鹽尻四十二〕今世五月端午の節、兒輩菖蒲兜とて翫ぶ、是を山城國藤の森の祭りより起りしやうにいふは非也、端午の鎧の事、史にも見えて久し、亦中頃關東の武士、五月六日野馬乘鞍とて、甲冑を帶し、馬上にて兵術の手合せをなす、刃引の太刀長刀を以てする由、伊豆日記嘉應元年五月等にみゆ、略○中後河原石打其遺風にして、兒輩はたを立、甲を著、木太刀をもつて戯れし、今石打の事、なくなり、大家の小兒のみにあらず、市井村落迄のぼりを立、かぶとをつらぬるも、唯壯觀を事として、何事といふを玄らす、東都の如きは、時尙人形をのみ多く置て、いよくいにしへに遠ざかり、本を忘るゝにや。

〔雍州府志七土産〕薬玉并燈籠 小川人家、○中端午所用木刀、或謂菖蒲刀、以其狀之相似、准節物而稱之、兒輩横腰間、端午石戰戲後、多以斯刀相戰、是謂菖蒲切、菖蒲與勝負倭語相近、故寓一戰勝負之義者乎、

〔骨董集上編上〕冑人形 増鏡うちの、雪の條に、五月五日所々より御かぶとの花くす玉など、色におほくまるれり云々とあり、かくいへるは、八十八代後深草院位につかせ給ひて、いとけなくおはしまし、建長三年辛亥五月五日の事なり、南畝叢書に載る某の隨筆に、右の増鏡の文を引て云、冑花は紙をもて冑をつくり、其上にさまぐの花をかたどり、あるひは紙にて人形をつくりするなどして、わらはべのもあそびにするとなり、今の端午の菖蒲冑は、此遺制なるべしといへり、おのれ此説により、ふところづきて、日本歲時記貞享五年印本のうちの繪を見るに、冑の上に人形をつくりするたる圖あり、これをもておもふに、冑人形といふ名目は、原冑の上に人形をつくりするたるゆゑに、玄かいひしを、後に冑と人形と別の物になりて、人形ばかりをも冑人形